

『陰影』

緋岡 篤作 (読み：ひおかかがり) (光丘=ヒカリガオカ アナグラム)



2021年度山口県高等学校演劇発表会最優秀賞受賞
2021年度中国地区高等学校演劇大会優秀賞受賞
2021年度春季全国高等学校演劇発表会 (@富田林) 出場

作品紹介

<公助・共助の重要性> 大切な人の陰の部分にどう手を差し伸べるべきかを考察する作品

登場人物

メイン6人～ (生徒数を加減できます。役を兼ねることも可能です)

上演許可はこちらにお願いします。

drama.club.at.hikari.city@gmail.com

この作品の趣旨を御理解いただいておりますら、
時代や上演団体に合わせて自由に改変いただいてもかまいません。

『陰影』

緋岡 篝
ひかりがおかのアナグラム



樋口 董	三年三組学級委員長（優柔不断で、思いをためこむ、煮え切らない優等生）
服部 明日香	三年三組生徒（人たらし。明るく男女問わず慕われるSランク生徒）
鎌田 千代	三年三組生徒（空気が読めず、何にでも口を出したがるかまってちゃん）
沼 美月	三年三組生徒（ため息だけでコミュニケーションを取るマイペース陰キャ）
大木 静	三年三組生徒（情が深く、自分の思いでクラスを引っ張る強烈キャラ）
中林 巴	三年三組生徒（自分の考えを持ちながらも、日和見に長けた控えめ陽キャ）
小森 葵	三年三組生徒（大木の威を借るお調子者。その場しのぎで、世渡り上手）
柳井 莉那	三年三組生徒（思ったことは歯に衣着せず発言する独立独歩の一匹狼。）
葉山 小町	三年三組生徒（陽キャグループに加わりたいが存在感の薄いタイプ）
吉田 隆盛	三年三組生徒（女「子を恐れながらも、クラスの女子の力関係を冷静に分析）
坂本 晋作	三年三組生徒（吉田と共に存在感を消しつつ、女子の動向を楽しんでいる）
高島 亜子	三年三組担任（三十路の熱い教師。座右の銘は「意志あれば道あり」）
沖田 勇	吹奏楽部員（野球応援で見事なソロ演奏を響かせたトランペッター）
近藤 歳三	吹奏楽部員（トランペット担当の三年生）
土方 総司	吹奏楽部員（トランペット担当の一年生）
服部 陽子	服部の祖母（服部明日香の親代わり・二年前から認知症）
渡辺 沙織	スーパーの店員

* ドラマは、樋口の視点で展開していく。樋口の心の声と現実のやりとりとの落差の演出が重要。前半は、服部へのときめきを、中盤では服部との関係がうまくいかないもどかしさを丁寧に描いていく工夫が必要。

* 舞台装置と照明の工夫について、光丘・光では、イレクターパイプで高さ一間半・幅一間の枠だけのパネルを四つ制作した。そのうち二つには障子紙を貼り、場面転換時に後ろから色彩豊かなシルエットや、要所で前のフットライトから人物の影を映し出した。上演が進行するにつれ、彩度を落とす演出にした。また、障子紙を貼らなかつた二つは、黒板や窓として見立ったり、並べて街並みを表したりした。テンポの良い場面転換を可能にするため、装置にはキャストを付けた。

* 音響について、場面転換に使用した「チャルダッシュ」は、旋律は鍵盤ハーモニカ、伴奏はピアノで演奏し、樋口の心情に合わせて速度等を加工している。劇中の合唱は Amazing Grace。ラストの樋口の語りに、服部の Amazing Grace の独唱を合わせた。

* キャラクターの識別を容易にするため、三年三組生徒には様々な色合いのポロシャツで衣装を揃えたが、文化祭前日から統一した黒いクラストシャツに着替えることで、作品全体の彩度を下げる工夫をしている。

#1 ファーストコンタクト記念日

舞台は、夏休み少し前の地方の公立高校、三年三組の始業前の教室。

生徒たちが文化祭用のクラスTシャツのデザインについて話し合いをしている。

学級委員長の樋口、教壇に立って何かを言っているが、声が届かない。

大木、中林、小森、自分たちの仲間内で勝手にデザインを決めている。

男子は、大木たちの様子を見て、こここそ話している。

鎌田は、大木たちの選んでいるデザインを、樋口に、後ろからジェスチャーで伝えようとしている。

大木、中林、小森、それぞれ無意識に大・中・小っぽいポーズをとって話している。

大木 (カタログを突き出して) 決まりだね。

中林 (大木の庄に押されて) う、うん。

小森 (大木の庄に押されて) 映え映え。

威圧的に腕と脚を広げる大木に媚びる小森、中林のポーズが、人文字の大中小に見える。

吉田 (大木、中林、小森を指さし) ああ！ 大中小になってる！

坂本 おおっ！ 大中小！

大・中・小 (男子の方を向いて) 何？

男子 いや、何でもないです。

鎌田 (男子の声が聞こえてきて) ふふっ、大木、中林、小森！

中・小 (鎌田に) 何？

鎌田、しゅんとする。

沼、登場し、坂本にぶつかりそうになる。ため息を吐く。坂本、慌てて避ける。

大木 (樋口にカタログを見せて) 樋口、決まったね。

小森 映え映え。

樋口 (苦笑い)

沼、大木の背中にハエが止まっているのを見つけ、(あるいは、嘘かも) たたき潰す。

大木 (驚いて) 何!?

沼 (自分の手についたハエを処理しながら) ハエ、ハエ。

大木 きゃあああああ！ (中林に背中を向け、ハエをつぶした跡がついていないかを探ねる) ねえ、大丈夫？ なにもない？

中林 大丈夫。付いてないよ。

大木 もうなんなん。びっくりした。

柳井、気だるげに単語帳を片手に教室に入ってくる。

樋口 (カタログを掲げて) じゃあ、大木さんの案でいいですか？

大木 (調子にのって指揮をしながら) いいです。

柳井 (樋口の掲げたカタログを見て) ださ。
大木 はあ？

一同、静まり返る。

樋口 ちよっと、柳井さん……。
大木 遅れて来たくせに、なんなん？
柳井 ダサいからダサって意見言っただけ。ええっ？ 今いない人、みんな発言権無
いってこと？

大木 早く来た私らが馬鹿みたいじゃん。
小森 (大木に媚びて) ねえ。
柳井 金は出しても口は出すなってこと？

大木 (柳井を睨んで) はあ？
樋口 (柳井に) いや、いいんだよ。意見言ってもらって。クラスみんなのTシャツだか
ら。

沼が大きなため息をつく。

樋口 「心の声…ため息、ため息。このため息は、進行の悪さへの非難？ (以降樋口が呟く
心の声を)」 「で表す」 沼さん何か意見ありますか。

沼 (樋口をじっと見つめたまま、またため息をつく) はあ。

吉田 (囁くように坂本と) うわっ、沼 (沼のため息沼にまた樋口がはまったよの意)

樋口 「沼にはまってしまった……」 (気持ちを切り替えて) 柳井さん。柳井さんの案、言
ってもらえますか？

柳井 ……センス良いのがいい。

大木 うざっ。

小森 ねえ。

樋口 (柳井に) だったら、具体的にあげてもらえますか？

柳井、見ていた単語帳を席に叩きつける。

大木 は？ 感じ悪……。

柳井、樋口を睨みながら近づき、教卓のカタログを不機嫌に取り、自席に戻る。
大木、中林、小森、ひそひそと話しながら嫌な視線を柳井に送る。

樋口 「私、間違ったこと言った？」

鎌田 (樋口に内緒話をしようとして教卓に駆け寄る) 董ちゃん、ちよっといい？

樋口 「うわあ、始まった！ 鎌田のかまってタイム」

これっていわゆる個人の好みの問題？ 結局ね、みんなが納得する答えなんてな
い！ もう覚悟して適当に決めちゃうしかないんだよ。でも、董ちゃんがやったら
嫌われちゃうじゃん。私変わるうか？

樋口 うん。「すぎるしかない孤独な私」

鎌田、意を決して教壇に立ち、演説をぶつかのようにならぬように教卓を叩く。

大木 何？

鎌田 (教壇から他の生徒たちに向かって) みんな、ちょっといい？

坂本 (ぼそっと) どうした？ 鎌田。

吉田 (ぼそっと) 鎌田、どうした？

鎌田 正直、こんな話し合い、無駄だと思うんだよね。

大木 何言ってるんの、あんた！

坂本 (ぼそっと) 止めとけて。

非難轟々。

鎌田 だってさ、十人十色じゃない？ だから、みんな、自己中はやめて、

大木 私が自己中だって？！

吉田 (ぼそっと) ほら言わんこっちゃない。

鎌田 ああ、違う、違う、違う。皆のことを悪く言ってるんじゃないよ……譲り合いが大

切だと私は思うんだよね。

坂本 (ぼそっと) だめだこりゃ。

大木 あんたに言われたくないし。

一同、静まり返る。

樋口 「この静まりは何？ 同意？ 反感？」(恐る恐る) 鎌田さんがこう言ってくれまし

たけど、なにか、意見ありますか？

鎌田 もう董ちゃん、かまたんで良いってば。(みんなに) で、私はこれがいいと思うんだ

けど、

大木 鎌田！

かまたんね。

大木 譲り合いやる？

鎌田 ああ、もちろん、もちろん。私の意見なんて忘れて。

大木 じゃあ、私の案でいいんだよね？

小森 賛成！ 映え！ 映え！

柳井 だから、もっとセンスの良いのにしてってば。

大木 あん？

沼 はあ。

樋口 「エンドレスうー」

大木 はい、じゃあ、決定！

吉田 (こそこそと) そこだけ、そこだけ。

坂本 (こそこそと) 大木が通る。

吉田、坂本、二人で大木の人文字を作っている。柳井、持っていたカタログを投げ捨てる。男子、それを見て怯える。

大木 樋口、注文票、このデザインで書いて！

樋口 「今、どこに決定する要素あった？」

大木 分かった？

鎌田 (不機嫌な柳井を窺いながら) え、待って、待って。柳井がさ……。

大木 柳井なんてほっとけばいいじゃん。(鎌田を押しつけて教壇に立ち) これ、背中にそれぞれ文字入れるから。みんなすぐ考えて！

小森 おっけ！(中林に) 何入れる？

鎌田 (大木の勢いに押されて) うん、大木のでいいと思う。ね、柳井。

柳井 それ、男子着れる？

男子 (恐る恐る) ……男子、いまうす。

樋口 「男子の存在忘れてた」じゃあ、男子の意見、聞きたいと思います。どうですか？

男子、もじもじしながら、お互いに押しつけ合う。

坂本 お前が言えよ。

吉田 お前が言え。

大木、教卓を叩き、男子の返答を促す。

男子 (怯えて) きやつ。

吉田 このクラス、男子に人権ないんで、スルーしちゃってください。

男子、ぼそぼそと喋り続ける。

大木 男子もさ、真面目に話してよ。最後の文化祭だよ。

柳井 だったらやめたげれば、そんなだっさいTシャツ。

大木 (柳井に) あんたさあ！

男子 (ドスが効いた大木の声に怯えて) きやつ。

沼 ……はあ。

大木 (男子に歩み寄り) うふん。男子どう？ これってユニセックスだよ。男子が着ても全然おしやれでしょ、ねえ。

中林 ……残念！

小森 うちの男子、何着ても似合わない。

男子、がくつと崩れる。

服部が教室に駆け込んでくる。

服部 ごめん、ごめん！

一同 服部い。

一同、服部を見て声をかける。男子、救いを求めるかのように服部に駆け寄る。

服部 すっご、みんな揃ってるじゃん。朝強いんだね。
樋口 「これが、服部明日香。私の生き方に大きな影を落とす人物。」

服部 このときはまだクラスの集まりに遅れてくる無責任な奴だとしか思ってなかった」
今どういう状況？ もうTシャツ決まった？

大木 ハッターい、柳井がさあ、私のデザイン、ダサイとか言うんだよ。

服部 (大木の案を覗き込んで) どれ、どれ？ おお、いいじゃん。
大木 よっしゃあ！

柳井 (服部に) え、まじ、子どもっぽくない？ 男子も着るんだよ。

服部、 陰悪な空気の二人と樋口を見比べる。

服部 じゃあ、Tシャツの責任者作ろう！ 樋口だけじゃ大変だし。

中林 ひぐりんねえ。

小森 会議回すの下手よね。

大木 向いてないよね。

樋口 「自分たちが学級委員長押し付けたの、忘れた？」

服部 誰がやっても難しいよ。

大木 んなことないやろ。

大木 正直、樋口、切っちゃっていいと思う。

鎌田 よね。よね。よね。

樋口 「出たあ、鎌田の必殺手のひら返し」

大木 じゃあ、切ろう、樋口。

服部 (鎌田、大木たちに) 言ったな？

大木 どきっ！

服部 いいの。服部さん、お願い。

樋口 (樋口に) OK！ (みんなに) じゃあ、大木がファンシーでカラフルな案出してく

れてるんだけど、柳井は？ なんか案あるの？

柳井 もっとなんか、色？ 大人っぽいのが……。

服部 大人っぽい？ 色に大人っぽいとか子どもっぽいとかあるの？

大木 ねえよ。

柳井 モノトーンとか、紫とか、藍色とか……。

服部 大人っぽいってお葬式みたいな色？

坂本 (ぼそっと) 座布団一枚。

吉田 (ぼそっと) 山田君一枚持ってきて。

沼 (嘔き出して) ぶふ。

柳井 いや、そーじゃなくて、同じ赤でもワインレッドみたいな落ち着いたのがいいの。

大木 ババくさ。

服部 OK。それ良い意見！

大木 ええっ？

鎌田 確かに！ パスカルは子どもっぽいよね。

小森 (呆れて) パスカルって……。

男子 (ぼそっと) 考える葦。

中林 (鎌田に) パステルね。

大木 ええっ、そのデザインのフワフワしてるところがいいんだって！
小森 そうそう。

柳井 ますます……（大木の全身をなめるように見る）

男子 （ぼそっと）ますます？

大木 なによ。

柳井 （噴き出して）ふっ、太って見えるよ。

男子 （こそそと）見えるー？

大木 何よ。あんた、デブって言いたいの？

服部 （爆笑）

柳井 いや、気にしてないなら、いいんじゃない。

大木 （激怒して）はあ？ あんた、人のこと言えんの？

柳井 （応戦して）はあ？！

吉田 （ぼそっと）五十歩百歩！

坂本 （ぼそっと）目くそ、鼻くそ！

柳井・大木 （男子たちに）はあ？！

男子 （怯えて）きやつ。

服部 （高らかに笑った後、大木、柳井、二人に親指を立てて）ドンマイ！

大木 ひどい、ハツタリイ。

中林 私、太って見えるのは嫌だあ。

大木 （中林に）なによ。

服部 じゃあ中林は？

中林 （大木を意識してカタコトになる）みんながいいって言ったのでいいよ。

男子 （こっそり）大人あ。

服部 （中林の肩に手を置いて）本当？

中林 でも……。

服部 お、なんかある？（中林に寄り添うようにやさしく声かけをする）

中林 黒にするならさ、こんな感じで、羽のデザインがあるのとか……。

小森 羽のデザインいいよね。絶対映えるよ。

大木 なによ。

大木、中林や小森が服部と楽しそうに新しい案を話しているのを見て、いじける。

服部 中林デザイン描けるの？ じゃあ色は柳井に任せて、（中林・小森に）二人でデザイン

ン考えたらいいいじゃん！（いじけている大木に気づいて）大木は、総監督ね！

い、大木？

えっ……？

服部 （大木を覗き込んで）ねっ。

大木 （服部に言われちゃ仕方ないなあと言うように）……まあ、いいけど……。

服部 よしっ。私は、慢性金欠だからさ。安くて、長持ちして、どこにでも着ていけるも

のがいいんだけど。

一同、口々に服部への同意を示す。

服部

みんなはどんなのがいい？

鎌田

あ、あたし、あの、羽があるやつもいいとは思うんだけど……。

服部

鎌田、仕切ってくれる？ みんなが希望する条件を聞こうよ。

鎌田

（嬉しくなって）私？ うん、全然いいよ。

吉田

（ぼそっと）大丈夫か？

坂本

（ぼそっと）鎌田だからな。

服部

（ふてくされている大木に）大木、あんた総監督なんだから、ちゃんとメモってよ。

大木

……ごめん。

樋口

「すっご。私の存在意義だよねえ……。ジエラシー半分、安堵半分」

服部

（樋口に駆け寄り）ひーぐちっ、ごめんね。遅れて来て仕切っちゃって。遅れてきた分、挽回できたかな？

樋口

うん！「（ときめいて）ひーぐちっ！ って、服部さん言ってくれたよね！」

服部

（樋口の肩を叩き）お疲れ、ひーぐちっ。（踵を返して話し合いに戻っていく）

樋口

うん。（うっとりとして服部の背中を見つめる）

担任の高島登場。

高島

おはよう。先生は感激しています。みんな、本当すっごい！ はい！ 自分たちに拍手！

樋口

「担任の高島亜子。生徒はアッコと呼ぶ。やたらに熱い感激屋」

高島

樋口さん、お疲れ様。あなたが学級委員長で本当に良かった。自主的に朝集まるなんてすっごいことだよ。

樋口

私は何も……。

高島

みんな、最高！ この調子で行けば、文化祭のクラス優勝も間違いない！ よし、

鎌田

今日を三の三の三の団結記念日にしよう！（ガッツポーズ）

大木

（ハンディファンを高島に向けて）熱っ。

沼

……はあ。

樋口

「アッコの空々しい言葉はともかく、その日は私の記念日になった。服部明日香フ

アーストコンタクト記念日」

#2

グループメイト記念日

LHR

前の休み時間。

移動教室

後で空っぽになった教室に樋口が一人入ってくる。

樋口

「ああ、また恐怖のLHR。締め切り今日とか勘弁してほしい。決まるかな、ピア

ノと指揮者。また押し付けられるパターン？」

遅れて入ってきた服部が樋口を見ている。

服部

樋口なら大丈夫だよ。

樋口

（口元を押さえて）え？ あ、私……。

服部 いや、肩が落ちてるからさ。気にしてるんだろうなと思って、今日のHR。

樋口 うん。「あつぶねえ、出なくて良かったあ」なんかだるいよね。

服部 そう？ 私、結構好きなんだよね。

樋口 好き？（好きという言葉に敏感に反応してしまって）

服部 （教室を見渡し）……こんな些細なことが。

樋口 ……え？

服部 （我に返って）あ、言っちゃった。（唇前に人差し指を立てて）内緒ね、これ。

樋口、服部の「内緒ね」のポーズにときめいて、ちょっと元気になる。
生徒たち、ガヤガヤとそれぞれのグループで喋りながら戻ってくる。

大木 小森、志望理由書写させて！

小森 ええっ？ 学科、何？

大木 小児科？

小森 え？

小林 小児科なんてあつたっけ？

大木 とにかく、白衣の天使なの！

小森 じゃあ、調理の写したらダメじゃん。

大木 食べ物患者に代えれば大丈夫でしょ。

小森 暴論！

葉山 小町、心理学科だから、近いかも。

大木 まじ？ 写させて！

葉山 だくめ！

大木 自分で書いた方がいいよ。

葉山

授業開始のチャイムが鳴り、高島、登場。

樋口 起立。

一同、号令に気づかず会話を続けている。

高島 （大声で）静かに！

大木 （大声に苛立って）何？

高島 しずカニ。（カニのポーズをする）

静かになる。

樋口 起立。気をつけ、礼。

高島 お願いします。

一同 お願いします。

高島 いやいよ高校生活最後の合唱コンクールの幕が上がります！ あなたたちが本気を見
せてくれるなら、先生も全力でサポートするからね！ 三の三の優勝のために、One

For all?

鎌田 (先生の言葉を受けて、ガッツポーズをしながら) ホールインワン!

服部 惜しい! All for one!

一同 オールフオーワン!

高島 悔いのないパフォーマンスにするためには今日の話し合いを成功させましょう! じ

やあこれから合唱の指揮者と伴奏者を決めます! 委員長、いいカニ?

樋口 「まだ言うカニ?」はい。

高島 じゃあ、先生はCDを用意して来るカニ!

高島、退場。教室内が騒がしくなる。

大木 (小森のいる後ろの席を向いて) ねえ、私の長所って何?

小森 長所? ……いっぱいありすぎて選べないな。

大木 中林は?

中林 うん……なんて言えばいいのかな……

柳井 (遠くから大声で) 声が大きいとこ!

大木 は?

中・小 (納得して) ああ。(何度も頷く)

沼 (噴き出して) がははは。

大木 (ムツとして、沼に) 何?

樋口 (必死で注目を集めようとして) じゃあ、ずっと決まっていな合唱の伴奏と指揮者

ですけど、誰かやってくれないですか?

……(無反応)

樋口 「だよねえ。想定内、想定内」伴奏は、そんなに難しくないと思う。結構簡単に覚え

られる曲だし、誰か、やってくれないですか?

ひぐりん、自分がやれば?

そうそう。ひぐりんで決定!

樋口 「はい。想定内です」

大木 話し合う意味だよね。

鎌田 (周りの様子を伺いながら立ち上がり) 指揮……指揮、指揮やる人いないんだった

ら、私、やってもいいよ、指揮者! (樋口に) ね、一緒にやろう、董ちゃん!

樋口 「出ましたとことん想定内。困った鎌田のかまってタイム」……はは。

(樋口の側に寄り、腕に自分の手を絡めて) みんな、伴奏、指揮は、ひぐりん、かま

たんコンビでやらせていただきます!

一同、急にざわめく。

大木 (焦って) え、指揮者、他にいないの?

小森 (必死で) 誰かー。誰かー。

大木 男子とか?

坂本 いや、いいです、いいです。

吉田 男子人数少ないんで抜けちゃうとやばいです。

柳井 どっちにしても、声、聞こえないけどね。

沼 はあ。

大木 鎌田は無理！

中林 ひぐりんはともかく……

大木 鎌田は最悪！

小森 鎌田はさあ、リズム感ないじゃん。

柳井 優勝はなくなったね。

小森 去年二組悲惨だったよねえ。

大木 (念仏を唱えるかのように) 鎌田、指揮、最悪！

服部 待って！ せっかく鎌田がやってくれるって言うてんだから、私は、鎌田で賛成！

鎌田、ありがとう！ よっし、みんな、頑張ろう。パート分けする？

大木 (ピンと来て) あっ、ハッター指揮やんなよ。ぴったりじゃん。

一同 それいい！

一同、指揮者服部案にわく。

服部 いや、私、朝弱いからさ。早く来れないし。

大木 練習なんて出てきてくれなくていいよ。本番やってくれればさ。

小森 大事な、本番だからさ。

鎌田 (から元気で) そうよね！ 適任がいたのに、ごめん、ごめん。ハッター、ぴったりだよねえ。

服部 鎌田、やってよ。

鎌田 (手を挙げて周囲を煽るように) ハッターがいいと思う人？

一同、手を上げ賛同を示す。

鎌田 (譲ると言うかのように両手を差し伸べて) どうぞ！

服部 (毅然と) それ、違うくない？ 鎌田、あんた自分がやりたいって言ったんだから、最後まで責任もってやるって言いきらなきや。

鎌田 (拗ねて) だって、みんなが……。

沼 ……はあ。

服部 (みんなに) 私は、手を挙げてくれた鎌田にかけてみたいよ。

樋口 (服部の勢いに、思わず) リズム感に自信ないなら、一緒に練習するから。

鎌田 董ちゃん……。

服部 反対の人？

大木 (こっさり小森に) これで挙げられる？

小森 無理無理無理無理。

服部 大木、中林、小森、小町、いい？

大木 みんながいいなら。

中林 別にいいけど。

小森 歌う側がリズム取るしかないね。

高島、CDデッキを持って走りこんで登場。

高島 (息切れしながら) どう? もう決まった?
大木 ひぐりんがピアノで、鎌田が指揮です。私はハッターが指揮やった方がいいと思うけど。

服部 大木。

高島 すごいわ。さすが三の三。今日は、即決記念日ね。

坂本 (ぼそっと) 毎日記念日かよ。

高島 いいでしょ。

吉田 どうでもいいです。

高島 はい! じゃあ次はバザーの班決め。最後の文化祭だし、好きな人同士でグループ作
っていいわよ。四人ずつにしましょう。ご褒美ね!

沼 ……はあ。

一同、歓声を上げる。

樋口 「何がご褒美? 拷問の間違いじゃない? 誰にも好かれてない自分の確認」

生徒たち、席を立ちグループに分かれる。(葉山、中林と嬉しそうに一つの椅子をシェアする。小森、大木、中林の側に寄る。柳井は別の子たちとグループを作っている想定。光丘・光バージョンでは実際には柳井の周辺には役者はいないが、誰かと話している演技) 取り残される、沼、鎌田、樋口。

高島 あらら、可哀想な人が出ないようにしてよ。

樋口 「はあい、可哀想な人で〜す」

鎌田 董ちゃん、あと、誰にする? ええっ? 沼しか残ってないんじゃない? やだ

あ、あのため息聞いたら不幸になる。

沼 ……はあ。

樋口 「どんぐりの背比べ」はは。(苦笑い)

大木 (立ち上がった服部に) ハッター、一緒の班になる!

葉山 (自分も所属する大木のグループの人数を数え、自分が余計だと気づき) 小町も一緒
って言ったのに。

そこ重量オーバーじゃん。

服部 (他のグループから、ぼそっと) ウケる。重量オーバーって。

柳井 クソ柳井!

服部 あ、違った。定員オーバー。(大木に) ごめん、ごめん。

大木 酷い! ハッターいゝ。

服部 ごめん。まだ班出来てないところあるから行くわ!

大木 (甘えて) えーハッターいー。

服部 (樋口たちに近づき) ひーぐちっ、ここ入れてよ。まだ三人でしょ?

樋口 あ、うん!

沼 (樋口、鎌田、自分を数えて) はあ……。

服部 沼、よろしく。(握手しようと手を差し出す)

沼 (目を白黒させて) ●\$※▲☆◎……。

沼、恐る恐る服部の手に自分の手を添える。

鎌田 (樋口に) ハッター何でここ？ 気まずい。

服部 (鎌田の言葉が聞こえて) 鎌田、私じゃ迷惑？

鎌田 (慌ててごまかして服部に抱きつき) ううん、全然、全然！

鎌田、突然、服部を突き放す。

鎌田 (鼻をくくんくんさせながら) 何か臭う。柔軟剤？ (鼻を押さえて) 薬っぽい。

服部 (戸惑って) ええっ…… (取り繕って冗談めかして) 何？ ヤバイ薬なんてやってないから。私じゃ嫌？

あ……ううん。……全然。

樋口 (鎌田を遮って) わ、私、嬉しい！ ありがとう。

服部 うん。(親指を立てる)

樋口 「思わず口走ってしまった」「嬉しい！」服部さんとぐっと近づけた！ その日はグ
ループメイト記念日」

#3 胸キュン記念日

樋口、服部、沼が、文化祭準備の買い出しから戻ってくる途中。

樋口 「案の定、私たちのグループはクラスのパシリ。でも、服部さんと話せる時間があ
るだけで、なんか私はすごく救われた」

樋口、服部の背中を嬉しそうに追う。

樋口 服部さん、あれ出した？

服部 何？

樋口 進路希望調査。

服部 ああ、出したよ。

樋口 もう？ すごい！ (沼を振り返って) 沼さんは？

沼 (溜息か肯定かよくわからない) ああ。

樋口 (作り笑いで) 決まってるんだあ……？ 服部さんは、どこいくの？ どうせ難関
大学でしょう？ 私、判定悪いんだあ。何が得意ってわけでもないし。大学行くの
やめちゃおっかなあ。

樋口、めっちゃしゃべるね。

服部 (私もそう思ってたって言わんばかりの上から目線を送り) はあっ。

樋口 え？ ……ごめん。つまらないよね、私の話なんて。

服部 いや、クラスじゃあ、あんまり話さないからさ。

樋口 ……自信なくて。面白いこと言えないから。

服部 お笑い芸人じゃないんだから。

樋口 え？

服部 面白いこと言わなくていいよ。まあ、でも、何気に面白い、隠れおしゃべりの樋

口！（勢いよく樋口を指さす）

え？

（驚いて）うわあっ。

あはは。

……はあ。

気負わないでいいよ。樋口が話したいように話して。

うん。

……なんか言ってたよ、亜子ちゃんが。

高島先生？

人生を変えたいって思ったなら学力をつけろって。良い大学に行けって。

へえ。

高みを目指せってさ。そしたら、見えてくるものがあるんだって。

いいな、目指せるものがある人は。私なんて中途半端で何にもないから。ピアノも

音大に行けるほどじゃない。武器になるほど得意な科目もない。行けて地方の国公

立かな。

……はあ。

沼さんは？

……自慢しないでよ。

え？

……はあ。

大学か……よくわかんないな。人生変えられんのかな。

服部さんだったら大丈夫だって。

はあ。

私も服部さんの頭が欲しい。

ねえ。手、見せて？

手？（恐る恐る手を差し出す）

服部、樋口の手をとり、じっと観る。

服部 これがピアノを弾く人の手か。

樋口 （照れて）普通の手だよ。

服部、樋口の手に指を絡ませ、恋人つなぎになる。

沼 （手を絡める二人に驚いて）ええっ。

鎌田、後ろから走ってきて、服部、樋口の間割って入る。

鎌田 もう、なんで置いてくの？ トイレ行くなって言ったじゃん。

樋口 （取り繕いながら、目だけは前を進む服部を追って）早く帰った方がいいかなと思
って……。

鎌田 ああ大木かあ。（樋口の腕に手を絡める）早く帰って来いって言ってたもんね。

高島、鎌田と逆方向から走ってくる。

高島 よかった。遅いから心配したのよ。

樋口 (高島に領収書を渡しながら) 先生、領収書です。

高島 おつりは？ 残りのお金は？

樋口 え？ 沼さん、持ってたよね？

一同、沼を振り返る。

沼 (首を横に振りながら) ううん。服部さんが……。 (服部を指さす)

服部 私？ もらってないよ。

沼 レジで渡したけど……。

服部 五千円札もらって、お釣りを渡したよね？

沼 (いっぴになく強気で高島に訴えるように) その封筒を服部さんに渡しました。待って。誰が最後？ 沼さんは服部さんに渡したのね？

高島 (首を縦に振る)

高島 服部さんは？ 本当にもらってないの？

服部 (狼狽えて) え、いや、……私？

樋口 (高島に聞こえるように) ごめん、私置いてきたかも。取ってくる！ (店に向かって走り出す)

服部 (沼に荷物を渡して) 先生私も行って来る。(樋口を追って走り出す) 沼、鎌田、荷物よろしく！

鎌田 また置いてくの？

樋口 大木怒るから、早く渡してえ！

沼 はあ。

沼、鎌田、高島、荷物を持って教室へ向かう。暗転。

照明が点くと再び店からの帰り道。服部と封筒を持った樋口、登場。

樋口 (封筒を振りながら) 沼さんが服部さんに渡したとか言ってたけど、声ちっちゃいからさ。聴こえなかったんだよね。きっと。ちっちゃいんだよ、声が！ ため息は

(沼の真似をして) 「はあ……」、でっかいくせにさ。

服部 ははは。分かんないけどね。私もなにかに集中すると周り見えなくなっちゃうタイプだから。

樋口 絶対沼さんのせいだよ！ お金手渡さずに、サッカー台に置くとかないよ。

服部 サッカー台って？

樋口 荷物詰める台。

服部 (サッカーボールを蹴る真似をしながら) なんでサッカー？

樋口 え？ ああ、えっと……作荷かな？ (宙に文字を書いて) 作るに荷物の荷。

服部 樋口、博識。

服部 なんで？ 服部さんの方が全然賢いの。

服部 (しみじみ) お金あって良かったよ。

服部

服部

服部

服部

服部

服部

服部

服部

樋口 (憤って)アッコも最悪。なんで服部さんのこと疑うの? ありえない! 服部さ

んが盗るわけないのにさ、あの言い方ないよ。教師として最悪!

服部 ふふ……樋口って、結構言うね。

樋口 私、こんな奴なの。心の中真っ黒なの。

服部 いや、悪い意味じゃなくて。……いいなって思って。

樋口 (戸惑って)……。

服部 いいわあ、樋口。なんかいいわあ、樋口! 急ごう!(樋口の腕を取る)

樋口 え?

服部、樋口を引っ張って駆け出す。樋口驚くが、すぐに顔をほころばせる。

樋口 「今日は二人の胸キュン記念日。雲一つない夕焼け空。私の頬も真っ赤」

#4 交錯

放課後の誰もいない教室。

樋口と手紙を持った大木が話している。

大木 (手紙を樋口に差し出して頭を下げる) お願い! 同じ吹奏楽部でしょ?

樋口 同じ部だから、ちよつと……。

大木 友達でしょ!

樋口 「私と大木は友達らしい」

大木 じゃあ、計画説明するね。

樋口 いや、説明されても……。

大木 まず、パート練が五時まででしょ?

樋口 「よく調べてる」

大木 そのちよつと前にここの教室にひぐりんが待ってるから来て、って沖田君に言っ

てあるから。

樋口 「それが言えるのになぜその時自分で渡さない?」

大木 これって渡してくれるだけいいから。

樋口 え、でも大木が渡した方が、ね、いいと思うな。

大木 あいつ、ちよつとヲタク気質じゃん? だからファーストインパクトがあたしだと

ちよつと刺激が強すぎると思うんだよね。

樋口 「あなたは一体何者?」

大木 ワンクッション挟んだ方がいいと思うんだよね。

樋口 「私はクッションか」

大木 じゃあ、頼んだよ! 陰で見とくから。

大木、教卓に隠れる。

沖田、近藤、土方、舞台下手側(廊下)に登場。

沖田、近藤と土方を追い返そうとする。

沖田 ついてくんなって!!

土方 まあまあまあ。

近藤 青春のおこぼれをください！

沖田 練習戻れよ！

土方 パートリーダーにお供します！

沖田 離れろって。

近藤 (大声で) 恋愛にうつつぬかしていいんですか？

沖田、慌てて、近藤の口を押える。

土方 抜け駆けは許しませんよ！

沖田、近藤と土方を突き飛ばす。

沖田 うるさい、うるさい。黙れ。

近藤・土方 痛っ。

廊下からの気配に、大木、樋口を教卓から追いやり、隠れる。

沖田、一人で教室に入ってくる。

土方 (近藤にこそこそと) どうする？

近藤 (こそこそと) 行くしかねえっす。

後を追ってきた近藤と土方が教室の入り口に隠れて様子を見守る。

沖田 (声を裏返して) ひ、ひいぐち、な、何？ ってか樋口に呼び出されるなんてめっちゃ嬉しいんだけど、俺の誤解？

樋口 「変な事言わないでよ、大木が見てるんだよ！」

樋口、再び大木の隠れている教卓の側に行き、小声で大木に自分で手紙を渡すように促す。

沖田 なにモジモジしてんだよ。いや本当はさ、俺から言いたかったからさ、言ってもいい？

樋口 (焦って、沖田のそばに寄る) いや、待って、本当に黙って。

沖田 ええっ！ ひ、ひ、樋口ってそういうタイプ？ いや、でも、こういうのは男からさ。

樋口 「だから大木が見てるんだって！」とりあえず、これ！ (沖田に手紙を渡す) 読んでもらったら全部分かるはずだから。

土方・近藤 ラブレター？！

沖田 手紙！？ 手紙なんて！ (手紙にキスをして) 古風じゃん。

大木、教卓下で、ガッツポーズをしようとして、頭を教卓に打ち付ける。

沖田 ま、これも樋口らしくていいなって思うけど。

樋口 とにかく、渡したからね、私。じゃあ……

樋口、去ろうとする。

沖田 (樋口の腕を取り、腰に手を回し、ぐっと体を寄せる) ちよ、待てよ。

樋口 「急に距離詰めてくんない！」

沖田 俺、次、樋口とどんな顔で会えばいいんだよ。

樋口 そのままでどうぞ。(沖田の肩越しに大木が見えて青ざめる) 私、大木に……。

沖田 (さらに樋口を抱き寄せ) おおきに？ おおきになって、お前、関西出身だったの？

樋口 (離れようともがくが、離れられない) だからそうじゃなくて！

服部、近藤と土方のいる扉とは反対の扉から登場。教室に入ってくる。

服部 (密着した沖田、樋口を見て) あ、ごめん。(退場)

樋口 (慌てて) 服部さん、違うの、これ(沖田を突き飛ばし、服部を追いかけ、戸口で叫ぶ) 全然ごめんじゃないの！

服部、すでに走り去っている。

沖田 (決めポーズで) ごめん。樋口、じゃあ、また部活の後で。(意味深に) 一緒に帰る？

樋口 だから違っつて！

沖田 ま、とにかく部活の後で！

土方の「すみれえ」という叫び声、近藤の尾崎豊の「I LOVE YOU」のトランペット演奏が廊下に響く。

沖田 (じゃれてくる男子たちに) なんだ、尾崎かよ。さ、行くぞ！

沖田、他の男子に絡まれながら退場。

樋口 「絶対誤解された。最悪」

大木 うわあああああ！ なんで、アイラブユー？ なんですすみれえっ？

樋口 いや、多分あれ、沖田の声じゃない……。

大木 沖田の事好きじゃないって嘘だったの？ 私をダシにしたかっただけ？

樋口 「あなたが私をダシにしたんですけどね」

大木 なんで黙ってんのよ！ 最低。あんたなんかもう友達じゃない！

樋口 「友達じゃなくなったらしい」

大木 頑張って手紙書いたのに。(号泣して椅子に座りこむ)

樋口 ごめんね、ややこしいことになっちゃって。思い込み激しいから、アイツ。

大木 アイツ？ アイツ呼ばわり？

樋口 あ、でもさ、中にはちゃんと名前書いてるんでしょ？ だったら、分かってくれるよ。

大木 (泣き止んで) 名前? 名前……名前……! (書いてないことに気付き号泣)
樋口 (ため息) はあ。「思えば、これが歯車の狂い始め」

#5 失恋記念日

放課後直前の教室。

三年三組の生徒たちがそれぞれの席に、高島が教壇に立っている。

樋口 気を付け、礼。

一同 失礼します。

高島 さようなら。

礼と同時に帰ろうとする服部を樋口が引き留める。

樋口 服部さん。

服部 何?

樋口 ちよっと時間ある?

服部 ごめん、急いでるんだけど。

樋口 そうやって、いつつも……。

服部 いつつも、何?

樋口 最近、おかしくない?

服部 え? 何?

樋口 いや、何でもないならいいけど。

服部 え、何、何? 言いたいことあるなら、言って。

樋口 ちよっと悩み聞いてもらえたら嬉しいなって思ったただけだから。

服部、時計を見る。樋口、それを見て拗ねる。

服部 じゃあ、五分だけなら。

樋口 いいよ、忙しいなら。また今度にする。

服部 私、いつつもこんなだからさ、お願い。今、言ってくると嬉しいな。

樋口 (話題を探すような顔をして教卓の方に移動して、思いついたように勢い良く)

……面談でさ、音楽の先生目指せばって言われたんだけど。

服部 へえ、いいじゃん。

樋口 でも、私、教師ってタイプじゃない?

服部 教師ってどんなタイプとかなくない? いろんなタイプがあっていいじゃん。

樋口 いや、そうだけど、私は違うかなって思わない?

服部 やりたくないの?

樋口 やりたくないわけじゃないけど。

服部 じゃあ、いいじゃん。やってみれば。

樋口 [うんぽもこっつ。]

服部 何?

樋口 ……雑、じゃない?

服部 え？ いや、樋口、全然雑じゃないよ、めっちゃ丁寧だよ。
樋口 ……あ、うん、ありがと。また、時間があるとき相談するね。

服部 もう大丈夫？

樋口 (嘘っぽく) うん。全然大丈夫。

服部 (笑顔で) ひーぐちっ？

樋口 (暗く) ……大丈夫。

沖田、登場。

沖田 (服部のひーぐちっと同じリズムで) すーみれっ。

樋口 名前で呼ばないでよ。

沖田 あ、ごめんごめん。(服部を気にせず、ぐっと樋口に近づいて) てかお前、俺のこと、避けてるだろ？

服部 ごめん、私、退散します。ごゆっくり！(教室を出ていこうとする)

沖田、服部に「悪いね」と言っかのような(自分的)イケメンポーズ。

樋口 服部さん、聞いて！ 私、沖田のことなんかどうでもいいから。ただの部員同士だ

から。だから、気なんて遣わないで。沖田のことなんか全然好きじゃないから。

沖田 (目を見開いて樋口を見て、その場に崩れ落ちる) ちよ、待てよ。

服部 だから？

樋口 ……え？

服部 私、急いであるから。もう行くね。

服部、退場。樋口、沖田、共に愕然として動けない。

沖田 ええっとお、整理させてもらってもいいかな？

近藤、土方が登場。教室に入ってきて、沖田の側に寄る。

土方 やっぱり、ここだあ。

近藤 イチャついてんじゃないっすよ、パートリーダー。

沖田 あはは……。

樋口 もう行くね。

沖田 (樋口に) うん。(男子二人に) 失恋した……。

土方 はやっ！

近藤 (ラブレターを裂きバラバラにするポーズで) あゝあ、ヤブレター。

樋口 「もう行くね。あなたがさらっと言ったから、今日は私の失恋記念日」

#6 屈折

放課後の教室。樋口がひとり、黒板を消している。

服部が教室に駆け込み、慌ただしく荷物を片付ける。

高島が服部の後を追って入ってくる。二人とも樋口には気づかない。

高島 (息を切らせて) 服部さん！ 服部さん、待ちなさい！

服部 だから、もういいんです。

樋口 (呟くように) 服部さん？

樋口の呟きは二人に届かない。

高島 服部さん、ちゃんと出してくれないと私も困るのよ。

服部 先生、私はいいつて言ってます。

高島 いいわけないでしょう。

服部 面談って強制ですか？

高島 そうです。

服部 じゃあ、やったってことにしておいてください。

高島 私は服部さんのことが心配なの。

服部 心配してくださるなら……自由をください。

高島 自由には責任が伴うの。

服部 (苦笑) ……いいな、先生は。

高島 どういうこと？

服部 幸せですね。

(むっとして) 服部さん、あなただけじゃないの、辛いのは。みんな苦しんでるの。進路を決めるのって簡単なことじゃないよね。自信を失ってしまったり、逃げたくなったりすると思う。でも、先生はそんなあなたたちのサポートをしたいって思ってる。簡単に諦めてほしくないの。だから、あなたの思いを聞かせてほしい。

(もう十分ですと言わんばかりに食い気味に) はい、先生は正しいと思います。

服部さんから話しくいなら、先生からお宅に電話しようと思うんだけど。

服部 (笑顔で) ご自由に。

高島 どういうこと？

服部 先生に言ってもらわなきゃいけないことは何もありませんよ。私、就職します。

高島 服部さんは大学に行くべき人だよ！ いろいろお家は大変だけど、諦めちゃだめ。

服部 可能性をつぶしちゃだめ！

高島 行けないですよ。

服部 服部さんなら大丈夫よ！ 先生、応援するから。叶わない夢なんてないんだよ。一

緒に、高み、目指そう！

服部 ……ははは。先生、私のこと当てにしてるでしょ？ 辛いなあ、学年一の秀才は。

(茶化して) よっしゃ、いっちゃ、高み目指しますか。富士山でも、エベレストで

も、何でも来いや！ はは、なんてね。

高島 (服部の肩に手を置き) 先生は服部さんの味方だから。

服部、高島から逃げるようにさっさと距離を取る。

服部 帰ります。

高島 明日、必ずプリントを再提出すること。

樋口 先生、高みって目指せる人と目指せない人がいるんですよね？ 私は目指せないタイプですか？

高島 (樋口がいたことに驚き) 何言ってるの？

服部 (笑顔で近づき) ひーぐちっ。樋口なら、できるよ。

高島 服部さん、あなたもよ。

高島 (分かった、分かったと言わんばかりに何度も頷き、親指を立てる) はい。良かった。

樋口 「良かった!? 『樋口ならできるよ』って服部さんの言葉に私は救われた。それまでの歯車のズレがすっと直ったような喜びを覚えた。……でも、全然良くなかった。何も分かってなかった、先生も私も。それから、長い夏休みを越えた。勉強漬けの夏休み。服部さんに会えない夏休み」

#7 晦冥^{かいめい}

夏休み明けの三年三組。文化祭まであと数日。放課後直前の教室。

クラス生徒がそれぞれの席に、高島が教壇に立っている。
樋口の心の声が響く間、ストップモーション。

樋口 「九月に入って毎朝の合唱練習。服部さんはいつも遅刻。私は必死で服部さんの時間を探すのに、服部さんは休みがちで、来てもすぐにいなくなっちゃって。私は、また避けられてるって思わないではいられなかった。私、何か悪いことした？」

ストップモーションが解ける。

樋口 気をつけ、礼。

一同 失礼します。

高島 さようなら。

樋口 服部さん！

服部 ゴメン！

服部、走って下校。

大木 (小森、中林に) 帰ろ。

小森 帰ろ、帰ろ。

ブル転。音楽(光丘・光バージョンではチャルダッシュの早回し)で踊りながら次のシーンへ。

別の日の放課後直前の教室。クラス生徒がそれぞれの席に、高島が教壇に立っている。

樋口 気をつけ、礼。

一同 失礼します。

高島 さようなら。

樋口 服部さん、服部さん！

服部、振り返らずに去る。

大木 避けられてんじゃないの？
小森 え、マジ？

ブル転。(光丘・光バージョンでは、樋口の脳内関係図が展開。服部拒絶のダンス)
また別の日の放課後直前の教室。クラス生徒がそれぞれの席に、高島が教壇に立っている。

樋口 気をつけ、礼。
一同 失礼しま……

服部、礼もせずに勢いよく荷物を取って去る。その勢いで椅子が倒れ、大きな音がする。

樋口 ……服部さん？(服部はもういない)

吉田・坂本 えー、怖い。

大木 (皮肉たっぷりに) 可哀相。

中林 ぜったい何かあったよね

小森 やばあい。

大木 樋口に飽きたんじゃない？

小森 断捨離かあ!?

中林 ゴミじゃないんだから!

高島 (帰っていく三人に) ちょっと……!

ブル転。さらに別の日の朝の教室。合唱のパート練習中。大木、中林、小森、柳井、沼が、鎌田の指揮に文句を言っている。樋口は、CDデッキに頬杖をつき呆然、クラスメイトの声が届いていない様子。

鎌田 だから、ピアノに合わせてるだけなんだって。

大木 どっちにしろずれまくってて、全然だめじゃない？

中林 練習してんの？

鎌田 してますう！ 夏休み中もずっとしてました。

小森 結果出てないじゃん。

鎌田 じゃあ、董ちゃんに言ってるよ。私、董ちゃんに習っただけだから。

中林 ひぐりん、どうするの？

大木 こんなテンポだと私ら、声、続かないよ。

樋口、みんなが自分に話しかけているとようやく気づく。

柳井 ひぐりんのピアノのスキルがテンポに間に合っていないだけじゃない？

大木 よねえ。

樋口 じゃあ、少しテンポアップして録り直してこよっか？ ゆっくりの方が心には来ると思うけど。

柳井 何それ？ 自分には問題ないと思ってるんだ。
大木 鎌田の指揮は無視するにしてもさ、伴奏がこんなだと、私ら、声、続かないよ。
沼 ……はあ。

中林 息切れした不様な状態を晒せって言うの。

小森 最悪よね。

樋口 だから、録り直してくるね。

沼 ……はあ。

大木 ああああ、やっぱり指揮はハツタリの方が良かったよね。

小森 ねえ。

鎌田 あはは、だよね。私もそう思う。(シユンとする)

大木 まあ、ハツタリもあんたたちのグループの居心地が悪いから、休みがちなんだろう

小森 けどね。

小森 ねえ。

柳井 ハツタリって、それが理由で休んでんの？

大木 だって最近急に休むようになったじゃん。

小森 グループ変わってからよね。

中林 え、グループ？ いったも一人だったじゃん。

小森 だって？ じゃあ、ますますひぐりんのせいじゃん。

大木 もうそうとしか考えられないよね。

鎌田 本番、ハツタリに代わってもらうから。

小森 あ、そう。

中林 まあ、いいけど。

大木 いいじゃん。いいじゃん。

鎌田 (樋口に) 董ちゃん、いい？

樋口 (鎌田に答えずに) 今日の夜、録り直してくるね。

中林 できるの？

小森 そうそう、できるのって聞いてんの！

樋口、下を向いて動かなくなる。

鎌田 (樋口が泣いているのに気づき) えっ、董ちゃん！？

大木 ちよつとやめてよ、何、何？ 私らが泣かしたみたいじゃん。

鎌田 小森と中林ができる？って(聞いたから)……。

中林 何？ 私らのせい？

小森 とぼつちり。できるか確認しただけじゃん。

大木 (嫌味たつぷりに) こういうところ、うまいよね。男子ってああいう涙に弱いから

さ。

柳井 ひがむな、ひがむな。

大木 (焦って) ひがんでないし、言いがかり。

柳井 で、どうなったの？

中・小 (柳井に向かって言うなと言うように、人差し指を唇に当てて) しっ。

柳井 (静止を意に介さず) 沖田とは？

大木 (平気だという風に取り繕って) 黒歴史掘り返さないでよ。魔が差しただけ。野球

の応援であのトランプット聞いちゃったからさ。

中・小 (共感を示して) ああ……。

大木 ほんの気の迷い。

柳井 まあ、やめて良かったんじゃない？ イケメンでもないし。

小森 そうそう。

大木 (狼狽えて) ……そうだよね。

柳井、教室を出ていく。

中林 柳井、どこ行くの？

柳井 トイレ。

大木 (取り繕って、柳井に) ね？ (樋口を指して) あの人がお似合いだよね。

柳井 (どうでもいいって調子で) ……かもね。

鎌田 董ちゃんは沖田のこと全然好きじゃないよ。同じ部活ってだけ。

大木 どうだか。そういうタイプって本当のこと言わないからさ。

服部登場。ドアの所に立って様子を見ている。

小森 (話を換えようと) ああ！ 良いこと思いついた。いっそさ、アカペラでやらない？

大木 いいねえ。

鎌田 アカペラ!?

中林 ユーチューブで見たの、すっごく良かったよね。

小森 でしょ。で、指揮もなしにして、体振りながらやったら、ゴスペルみたいでよくない？

大木・中林 いいねえ。

大木、中林、小森、ゴスペルを真似て腕を振り、体を揺すってはしゃぐ。

服部 ちょっと待って。そこ三人、それはなくない？ それ、意地悪で言ってるの？

小森 いや、単なる思い付き。

大木 でもアリでしょ？

服部 大木。

服部、大木の頬を手で挟み、じっと大木を見つめる。樋口、その様子を盗み見ている。

大木 ハッターい…… (甘えた調子で) ……分かったあ。

沼 はあ。

服部 遅く来て仕切って悪いけどさ、パート練に戻るんていい？

鎌田 ハッター、本番はさ、ハッターが指揮やってくれる？

服部 鎌田、自信持ちなよ。ちゃんと出来るって。ね。今は調整中だから、うまく行かないだろうけどさ、出来るって！ ね、大中小三人組。

大木 はいはい。

小森 もうハッター、その呼び方はやめてよ。

中林 勝手にセツトにしないでよ。

沼 大・中・小、ぶふ（吹き出して）。

大・中・小 （沼に）何？

沼 はあ。

大木 （舌打ち）練習するよ。

小森 はうい。

生徒たち、大木の指示でパート練習を始める。服部、樋口のそばに行く。

服部 （樋口の背中に手を添え）ひーぐちっ！ おはよう、元気だして。

樋口 （シラけて）はは。私、嫌われてるから。

服部 そういふ問題？

樋口 （拗ねて）そうだよ。沖田のことで逆恨みされてるし……。服部さんもそうだしよっ

服部 え、なんのこと？

樋口 （更に拗ねて）そうやって……。

鎌田 （突然の大声！）えっ！ ハッターも沖田のこと好きだったの？

小森、中林、ざわめく。

樋口 鎌田は黙ってて。

服部 んなわけないじゃん。私、沖田って子、知らないもん。

大木 （小森と中林に）ないない。ないって。

鎌田 じゃあ、なんで、ハッターもそうなの。

樋口 （服部をじっと見つめる）……もういい。

服部 （優しく）樋口はどうしたいの？

樋口 やめようかな。

鎌田 ええ、なんで？ 夏休み中もずっと練習してきたのに。

服部 そうなんだね。（樋口に）それでもいいの？ やめちゃって。

樋口 みんな、押し付けておいて、私たちが目立つのが嫌なんだよ。

服部 そういふ問題？

樋口 どうせ私なんか。

服部 （きっぱりと）そう、分かった。じゃあ、みんなに言おう。

樋口 え？

服部 樋口がピアノやりたくないなら、アカペラで練習しなきゃでしょ？

樋口 どういうこと？

服部 だって、やりたくないんでしょ？

樋口 （目を見開いて、服部を見る）いや、え……？

服部 やりたくないの？ やりたくないの？

樋口 （そっぽを向いて。甘えた声で）分かんない。

服部 （髪の毛をかきむしり、ぼそっと）面倒くせえな。

樋口 （服部を見て）え？

鎌田 めんどくせえ……？

服部 あノさ、自分のやりたいことぐらい自分で選ぶべきじゃない？ 樋口には、選べる自由があるんだからさ。

樋口 あんたに何が分かるのよ！ 私は、合唱練習のために毎朝早くから来てたんだよ。受験のための大切な時期なのに、夏休み中もずっと練習してきたの。服部さんはさ、なんだかんだ理由付けて夏休み一日も来てないし、朝練だっていつつも遅れてくるし。沖田のことがあってから、いろいろ嫌味言われ続けているのに、相談しようと思っただって何も聞いてくれないし。ずっとずっと一人だったんだよ。

鎌田、私、ずっとそばにいたよね？ と言わんばかりに自分を指さして、首を傾げる。

服部 ごめん。私に言う権利無かったね。パート練行くね。

樋口 「待って！ 行かないで。服部さんと話したいの！ と言えない私」

#8 死角

夜。樋口、部活からの帰り道。

スーパーの裏手で、祖母を連れ、店員に頭を下げている服部を見かける。

樋口 「いっぱいいっぱいだった私。服部さんのいっぱいはいない気持ちには気づけず、ただただ傷ついていた。その日の部活帰り、スーパーの裏手で、私は見てはいけな
ものを見てしまった気がした」

服部 (深々と頭を下げ) 本当にご迷惑をおかけしました。

店員 いや、こっちはびっくりしたただだから。量り売りの佃煮むしやむしや食べ出しちやうんだから、周りのお客さんもドン引きだったよねえ。

服部 本当におすすめでした。最近、目が離せなくて。

服部、フラフラと動き出す祖母を捕まえようとする。

陽子 (怒って) 離せ！ 痛いやろ！ (樋口に向かって) 助けてくださあい。殺されるよお！

服部 (樋口と認識しないまま) すみません。お騒がせしています。(店員に) すみません。すぐ連れて帰ります。

店員 大丈夫？ タクシー呼ぼうか？

服部 いえ(祖母を押さえていた手を離す)

祖母、服部の髪を掴んで振り回す。服部、じっと耐える。

服部 ……落ち着いたら、大丈夫なので。

店員 そう？ じゃあ、気を付けてね。

服部 はい。ありがとうございます。(祖母に) 陽子さん、陽子さん。

陽子 (服部に掴まれて) ひいっ。

服部 今日の晩ご飯何にしようか。いかなこの佃煮がええねえ。陽子さん好きじゃ？

ね、いかなご。

陽子 (嬉しそうに) いかなご、ええねえ！ (服部を孫ではなく、自分の母親と間違えて、子どものような声で) お母さん一緒に食べよう。

服部 うん。お家帰って食べようか。

陽子 帰ります！ 帰ります！

服部 帰ろう。

カラスが激しく鳴いて飛び立つ。 溶暗。

#9 黄昏記念日

文化祭直前。夕日の差し込む教室に、服部と樋口、生徒たちがいる。

生徒たちは黒板アートを制作したり、ポスターを描いたり、会話を楽しんだりしている。服部は窓辺で外を見ながら深いため息をつく。

樋口はその様子を少し離れて見ている。

樋口 今日は急がなくていいの？

服部 (腕時計を見て) 短縮授業だから。文化祭、さあさま。

樋口 そっか。……この前は、ごめん。

服部 結局、ピアノやることにしたんだね。

樋口 うん。自分で決めた。悔しかったから、あのまま諦めちゃうの。

服部 うん。樋口ならそうするって思ってた。

樋口 (服部をじっと見つめて) ありがとう。

服部 うん。

樋口 (側に並んで) 文化祭週間さあさまだね。

服部 だね。(ため息)

樋口 疲れてる？

服部 ううん。楽しい。

樋口 それ、楽しい顔？

服部 (大げさな笑顔を樋口に突き出して) 楽しい！

樋口、吹き出す。服部も満面の笑顔。

樋口 (言い淀みつつも) ……この前、スーパーの裏、おばあちゃんと一緒にいたでしょ？

服部 (戸惑って) あ……

樋口 見間違えかもしれないけど。

服部 あ、うん。ちょっとね、ばあちゃんが迷っちゃってさ。困ったもんだよ。放っておくと何しでかすか分からないんだから。

樋口 (真剣に) 大丈夫なの？

服部 まあね。扱い分かってるからね。

樋口 そっか。……家族思いだね。

服部 ……育ててもらったからね。

樋口 おばあちゃん子なんだ。

服部 まあね。

樋口 ねえ、手見せて。

服部 (戸惑って) 手？

樋口 おばあちゃん子の手が見たい。

服部 ガッサガサだよ。

樋口 (服部の手を見て) どれどれ……大きくて、温かい。

服部と樋口、恋人つなぎをして、じっと窓の外を見る。

服部 (空を見上げて重いため息を吐く) はあああああ、このまま時間が止まればいいのに……。

樋口 (服部の手を自分の頬に添えて) うん。……ずっと一緒にいたい。

服部 (樋口を見て) え？

樋口 なんでもない。ああ、高校生活もあと半年かあ。

服部 (呟くように) 半年先のことなんて考えられない。

樋口 ほんとな。不確定要素だらけだもん。不安でいっぱい。

服部 (じっと樋口を見て) ……そっかあ、樋口も不安なんだ。

樋口 (きっぱりと) でも、教師、目指してみるよ。

服部 ふふ、やっぱりやるんだ。

樋口 怒ってる？

服部 なんです？ 樋口らしいじゃんって思う。

樋口 服部さんは？

服部 (頼りなく) ……私らしさって、なんだろう。

樋口 (迷いなく) 服部さんは、服部さんだよ。ぶれない。しなやかで、強い。

服部 (樋口をじっと見て、目をそらして) ありがとう。

服部の樋口からそらした目はうるんでいるが、樋口は気づかない。

樋口 (服部の「ありがとう」に照れて) 私、自分が服部さんだったらどんなにいいだろうって思うもん。

服部 そう？ (こみあげてくるものを抑えて) ……そんなに良くないよ。

樋口 服部さんにとっては、私なんて、ただの面白くないクラスメイトの一人なんだろうけど。

服部 (声を荒げて) そんな言い方やめて。

クラスメイト、二人の方を見る。教室内ざわつく。「まただよ」などの声が聞こえる。

樋口 (周囲を気にしながら) ……そうだね。

服部 (樋口の手を両手で握り、きっぱりと) 樋口と話すの、好きだから。

樋口 (服部の「好き」に驚き、ひたすら照れて) ……ああ、私たち、半年後、どうなってるんだろ。

服部 (樋口の思いには気づかないまま) ……見えないなあ、未来の自分。

樋口 私、一生忘れない。

服部 何を？

樋口 (空を指して) 今日の太陽。

服部 いつもの太陽と違うの？

樋口 (服部を覗き込み) あと、真っ赤な服部さん。

服部 え？ 真っ赤？

樋口 真っ赤！

樋口、服部の手を両手で包む。

樋口、服部、笑い合う。

樋口 「真っ赤な目の服部さん。一筋の糸を手繰り寄せることのできなかった自分が、
まわしる」

溶暗。

#10 祝祭

文化祭当日。

三年三組の生徒たちがゴスペルのように体を揺らしながら Amazing Grace を歌っている。

鎌田、自信いっぱい、大きく伸びて指揮をしている。

樋口は伴奏をしながら、服部を見つめる。

I was grace that taught my heart to fear,
And grace my fears relieved;
How precious did that grace appear!
The hour I first believed.

Amazing grace! How sweet the sound!
That saved a wretch like me
I once was lost, but now I am found;
Was blind, but now I see.
Was blind,
but now I see.

樋口 「服部さんは、歌いながら泣いていた。頬がてかてかに光っていたのを私はピアノ
を弾きながら見た。私のために泣いてくれてるんだと思ってた。「服部さん……」」

#11 陰影

救急車、パトカーのサイレンが鳴り響き、舞台上に赤い点滅が続く。電話も鳴り止まない。
カメラのシャッター音が鳴り響く。騒ぎ立てる人々。
聞こえてくる、服部の歌う、Amazing Grace。

樋口の心の中。
合唱の時と同じように歌い続ける服部。

樋口 服部さんがおばあちゃんを刺した。

服部の後ろに浮かび上がる記事。

「殺人未遂」

「優等生転落」

「なぜ誰も気づけなかった」

樋口 私はそれを週刊誌の記事で知った。すぐそばにいた服部さんのことを、知らない誰かのことのように、活字で知った。

服部さんは小学校の頃からおばあちゃんと二人暮らし。その理由は書いてなかった。おばあちゃんはデイサービスを利用していたけれど、二年前から認知症で、服部さんはここ二ヶ月ほとんど睡眠が取れていなかったという。

私は、服部さんを責めてしまった。服部さんから休息時間を奪おうとした。自分の馬鹿みたいな悩みをぶつけるだけで、服部さんの話さえ聞けなかった。私は何を見ていたんだろう……。

歌っていた服部が、突然、樋口の前に相対して立つ。

服部 ひーぐちっ！

樋口 ……服部さん、私には言えなかった？

服部は何も答えず、気持ち良さそうに、再び、歌い続ける。が、服部を見失って、必死で探し求める樋口。ようやく、また服部を見出す。

樋口 (見つけた服部に) いつか、私にも見えるようになるかな? ……服部さん。

服部、黙ったまま、親指を立てて見せる。服部は、どんな表情をしているのか? 見えるのは、服部のシルエットのみ……。

陰影 幕

